平成の芥川賞・直木賞 Vol.2

綿矢、金原……
若き作家たちの台頭

報道記録　平成11年～20年

読売新聞社

読売新聞
アーカイブ選書

The Yomiuri Shimbun

読売新聞アーカイブ選書

平成の芥川賞・直木賞　Vol.2

綿矢、金原……若き作家たちの台頭

報道記録　平成11年～20年

読売新聞社 刊

はじめに

芥川賞と直木賞において、本書に収録した平成11年から20年までの10年間（１２０回～１３９回）は、若い世代の台頭や異文化からの参入、さらには純文学とエンターテインメント小説との境界がますます曖昧になるといった動きが、いっそう顕著になった時代である。

この間の、もっとも大きなトピックと言えば、第１３０回（16年１月選考会）の芥川賞だろう。19歳の綿矢りささんが「蹴りたい背中」で、20歳の金原ひとみさんが「蛇にピアス」で、いずれも史上最年少で選ばれた。両作を掲載した「文芸春秋」の売り上げが１００万部を突破するなど、若い女性二人の受賞は大きな社会現象にもなった。

純文学の新人賞である芥川賞は、様々な可能性を持った作家の発掘に力を入れてきた。１２０回（11年１月選考会）でも、京都大学４年生だった平野啓一郎さんの「日蝕（にっしょく）」を選び、１３９回（20年７月選考会）では、中国人の楊逸（ヤンイー）さんへの授賞を決めた。楊さんは、日本語以外を母語とする作家として初めて、芥川賞に輝いた。

一方、エンターテインメント小説を対象とする直木賞は、創設当初こそ新人賞という位置づけだったが、既に、一定のキャリアを持つ実力派作家のための賞へと移行していたこ

ともあって、「これからも長く書き続けていけるであろう作家」の作品が選ばれる傾向が強くなっていた。短いキャリアしか持たずに初めてノミネートされた作家に対しては、選考委員たちが「もう一作読みたい」などと慎重な姿勢を見せることも少なくなかった。

そんな直木賞の姿勢に対して「旬の作家を取りこぼしてしまうのではないか」と反発し、書店員有志らが15年に創設したのが、本屋大賞だった。直木賞のこの「慎重さ」がなければ、本屋大賞は生まれなかったのかもしれないと思うと、なんとも感慨深い。

冒頭でも触れたが、この時代は、純文学とエンターテインメント小説との境界線が、より淡くなった時期でもあった。それ以前も山田詠美さんのように、芥川賞候補になった後に直木賞を受けた作家はいたが、１２７回（14年7月選考会）の芥川賞に「パーク・ライフ」で選ばれた吉田修一さんは、そのひと月前に、エンターテインメント小説に授けられる山本周五郎賞を別の作品で受けたばかりだった。１３２回（17年1月選考会）で直木賞に輝いた角田光代さんもデビューは純文学で、芥川賞候補に3度なった末での直木賞受賞。また、１３４回（18年1月選考会）で芥川賞を受けた絲山秋子さんは、直近の１３３回では直木賞の候補になっていた。

ただ、純文学とは何か、エンターテインメント小説とはどう違うのか、を説明するのは難しい。楊逸さんが芥川賞受賞後に行ったトークショーの記事には、彼女のこんな言葉が

残されていた。

「『純文学』の定義がいまだにわからない。欧米、中国には純文学という分野はない。翻訳は何文学と呼びますか？」

「私は、自分のためより、社会のために書きたい。社会を反映し、社会に影響を与えないなら書く意味はないと考えている」

そこには、純文学とエンターテインメント小説という境界はない。では、純文学とエンターテインメント小説の間にあるものは、いったい何なのか。吉田修一さんの芥川賞受賞を巡る記事の中にあった山田詠美さんの言葉に、一つの真実が宿っているようにも感じる。

「最高の純文学は、最高のエンターテインメント」

読売新聞東京本社　編集委員　村田雅幸

目次

第120回――平成11年1月14日選考会　9
▽芥川賞　平野啓一郎「日蝕」
▽直木賞　宮部みゆき「理由」

第121回――平成11年7月15日選考会　17
▽芥川賞　なし
▽直木賞　佐藤賢一「王妃の離婚」／桐野夏生「柔らかな頬」

第122回――平成12年1月14日選考会　23
▽芥川賞　玄月「蔭の棲みか」／藤野千夜「夏の約束」
▽直木賞　なかにし礼「長崎ぶらぶら節」

第123回――平成12年7月14日選考会　33
▽芥川賞　町田康「きれぎれ」／松浦寿輝「花腐し」
▽直木賞　金城一紀「GO」／船戸与一「虹の谷の五月」

第124回――平成13年1月16日選考会　41
▽芥川賞　堀江敏幸「熊の敷石」／青来有一「聖水」
▽直木賞　山本文緒「プラナリア」／重松清「ビタミンF」

第125回――平成13年7月17日選考会 55
▽芥川賞　玄侑宗久「中陰の花」
▽直木賞　藤田宜永「愛の領分」

第126回――平成14年1月16日選考会 65
▽芥川賞　長嶋有「猛スピードで母は」
▽直木賞　山本一力「あかね空」／唯川恵「肩ごしの恋人」

第127回――平成14年7月17日選考会 83
▽芥川賞　吉田修一「パーク・ライフ」
▽直木賞　乙川優三郎「生きる」

第128回――平成15年1月16日選考会 91
▽芥川賞　大道珠貴「しょっぱいドライブ」
▽直木賞　なし

第129回――平成15年7月17日選考会 107
▽芥川賞　吉村萬壱「ハリガネムシ」
▽直木賞　石田衣良「4TEEN　フォーティーン」／村山由佳「星々の舟」

第130回――平成16年1月15日選考会 117
▽芥川賞　金原ひとみ「蛇にピアス」／綿矢りさ「蹴りたい背中」
▽直木賞　江國香織「号泣する準備はできていた」／京極夏彦「後巷説百物語」

第131回――平成16年7月15日選考会 135
▽芥川賞　モブ・ノリオ「介護入門」
▽直木賞　奥田英朗「空中ブランコ」／熊谷達也「邂逅の森」

第132回――平成17年1月13日選考会 151
▽芥川賞　阿部和重「グランド・フィナーレ」
▽直木賞　角田光代「対岸の彼女」

第133回――平成17年7月14日選考会 159
▽芥川賞　中村文則「土の中の子供」
▽直木賞　朱川湊人「花まんま」

第134回――平成18年1月17日選考会 173
▽芥川賞　絲山秋子「沖で待つ」
▽直木賞　東野圭吾「容疑者Xの献身」

第135回――平成18年7月13日選考会 185
▽芥川賞　伊藤たかみ「八月の路上に捨てる」
▽直木賞　三浦しをん「まほろ駅前多田便利軒」／森絵都「風に舞いあがるビニールシート」

第136回――平成19年1月16日選考会 197
▽芥川賞　青山七恵「ひとり日和」
▽直木賞　なし

第137回――平成19年7月17日選考会 209
▽芥川賞　諏訪哲史「アサッテの人」
▽直木賞　松井今朝子「吉原手引草」

第138回――平成20年1月16日選考会 219
▽芥川賞　川上未映子「乳と卵」
▽直木賞　桜庭一樹「私の男」

第139回――平成20年7月15日選考会 227
▽芥川賞　楊逸「時が滲む朝」
▽直木賞　井上荒野「切羽へ」

◎この電子書籍は、平成11年（1999年）～平成20年（2008年）にかけて、読売新聞に掲載された芥川賞・直木賞の関連記事を一冊にまとめたものです。掲載日は各記事に記載しています。肩書、年齢、その他の情報は、掲載当時のままです。なお、詳細な個人情報などについては、一部削除しています。

第１２０回――平成11年1月14日選考会

▽芥川賞受賞作

平野啓一郎「日蝕（にっしょく）」（「新潮」８月号）

▽直木賞受賞作

宮部みゆき「理由」（朝日新聞社刊）

よみうり抄

◆芥川・直木賞候補作発表

第百二十回芥川賞・直木賞（日本文学振興会主催）の候補作が七日、発表された。

芥川賞＝平野啓一郎「日蝕」（新潮8月号）▽若合春侑「カタカナ三十九字の遺書」（文学界12月号）▽安達千夏「あなたがほしい」（すばる11月号）▽福島次郎「蝶のかたみ」（文学界11月号）▽赤坂真理「ヴァイブレータ」（群像12月号）

直木賞＝服部まゆみ「この闇と光」（角川書店）▽久世光彦「逃げ水半次無用帖」（文芸春秋）▽宮部みゆき「理由」（朝日新聞社）▽東野圭吾「秘密」（文芸春秋）▽馳星周「夜光虫」（角川書店）▽横山秀夫「陰の季節」（文芸春秋）

選考会は一月十四日に東京・築地の「新喜楽」で行われる。

芥川賞に京大生・平野さん

現役学生 23年ぶり 高い評価「三島の再来」

直木賞、宮部みゆきさん

第百二十回芥川賞（日本文学振興会主催）は十四日夜の選考会で、平野啓一郎さん(23)の「日蝕」に決まった。平野さんは京都大学法学部の四年生。現役の大学生が芥川賞を受賞するのは、村上龍さん以来二十三年ぶりのことだ。

受賞作は、十五世紀末、ルネサンス前夜の南フランスを舞台に、カトリックの学僧の超越的な体験を重厚な文体で描いた奇譚。無名の学生だった平野さんが、しにせの文芸誌「新潮」に投稿した二百五十枚の中編小説だ。同編集部は、「三島由紀夫の再来」と銘打って昨年七月、同誌八月号の巻頭に掲載した。

魔女狩り、錬金術、両性具有……。最後に太陽と人間が交わるという究極の宗教的体験を描いた異色作。

＜冀（こいねがわくは）、上（かみ）の誓いと倶に、下の拙き言葉の数々が主の御許へと到（いた）かむことを＞

漢語的な表現を巡り、発表当初から賛否両論が渦巻いた。「現代小説の異端にして、文学の正統をなす」という高い評価の一方、文章が懐古調で衒学的などの批判にさらされ、選考が注目されていた。

東京・築地の「新喜楽」で開かれた選考会では、大半の委員が支持し、すんなりと受賞。記者会見した日野啓三選考委員は、「志が高く、知識も非常に豊富。難しい漢字を使う擬古文の文体には疑問の声も出たが、作品の内容にふさわしいのではないか。また、言葉が分かりやすくなった分、表現も思考もひらべったくなってしまった現代において、本来の書き言葉を取り入れる試みは意味がある」と評価した。現役の大学生が受賞するのは石原慎太郎、大江健三郎、村上龍の各氏に次いで四人目。

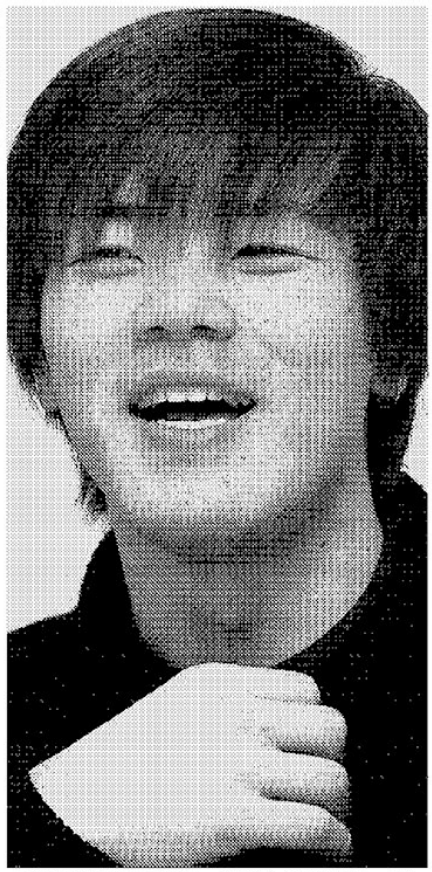
◇

贈呈式は、両賞とも二月十九日午後七時から丸の内の東京会館で。正賞の時計と副賞百万円が贈られる。

直木賞の選考も同日行われ、今回で六回目の候補になった人気作家、宮部みゆきさん(38)＝「顔」19面＝の「理由」（朝日新聞社）に決まった。

バブルがはじけ、値下がりした元〝億ション〟で起きた「一家四人惨殺事件」を調べる過程で浮かび上がる住宅ローンの悲劇、現代家族のひからびた風景を、ドキュメンタリー手法で描いた社会派ミステリーだ。

五木寛之選考委員は「現代日本の光と闇、日本人の社会的状況、心の深淵に触れている。文体もしっかりしている。すべての選考委員が支持した」と語った。



芥川賞受賞が決まった京大生の作家、平野啓一郎さん（14日）＝金田昭一撮影

今風……左耳にピアス

「はい。喜んで……。ありがとうございます」

十四日昼に京都の下宿から上京し、都内の出版社の宿泊施設で担当編集者らと吉報を待っていた平野さんは、その瞬間、正座し直し、受話器を持ったままお辞儀をした。

左の耳たぶにはピアスがキラリ。デビュー作でいきなり文壇の登竜門を突破したのは、一見今風の物静かな青年だった。昨年末まで金髪に染めていたという。

直後に開かれた受賞会見では、「懐古趣味ととられるのは嫌です。常に現代的な関心を持っています。混とんとした文学状況ですが、次の時代への新しい可能性の一人として、ぼくがいると思います」と、強気な構え。「なぜ小説を書くのか」といった質問には、「本質的な文学論は、いずれきちんとした形で書くまで、待っていて下さい」ときまじめな一面も見せた。

愛知県生まれ。乳児のうちに父が急死し、高校までは母の故郷、北九州市で育った。文学だけでなく、音楽や美術まで幅広く芸術的関心を持ち、「ガリ勉タイプでなく、余裕のある生徒だった」と、高校時代の担任評。仲間とバンドを組んでいた時期もある。

法学部で政治思想史を専攻しているが、二年前から創作と読書中心の生活。一年間留年して書き上げた受賞作は「就職活動のつもりもあって」、出版社に書き送ったものだった。しかし「二月の授賞式当日に行われる卒業試験の方が、うまく突破できるかどうか……」と頭をかいた。

強運の持ち主は努力家でもある。ボードレールやランボー、エリアーデなど、近代西欧の「知」をたっぷり読み込んできた。同時に、「日蝕」を書くにあたっては森鷗外の史伝ものの朗読テープを繰り返し聞き、文体を体に染みつかせた。

＜三島由紀夫の再来＞という世評にも、「最も影響を受けたのが三島。気質も似ているかも」と、臆するふうもない。「この早熟な才能は、芥川竜之介や中島敦をほうふつとさせる」と語る選考委員もいた。

卒業後は創作のかたわらアルバイトも覚悟していたが、受賞作の増刷も決まり、「しばらくは小説に専念できそうでうれしい」。会見を終えると、早速、原稿の注文が舞い込んでいた。

デビュー作で〝ホームラン〟

芥川賞に京大生・平野さん

「三島再来」呼び声高く

文体は重厚　ピアスきらり

デビュー作の「日蝕」で十四日、いきなり文壇の登竜門、「芥川賞」受賞を決めた京大法学部四年生、平野啓一郎さん(23)。一見、今風の物静かな青年で、一年間留年して書き上げた受賞作は、「就職活動のつもりもあって」出版社に書き送ったものだった。三島由紀夫の再来ともされる平野さんは、今春の卒業後の進路については執筆の傍らアルバイトも覚悟していたが、増刷も決まり、「しばらくは小説に専念できそうで、うれしい」。受賞会見を終えると、早速、原稿の注文が舞い込んでいた。

「はい。喜んで……。ありがとうございます」

十四日昼に京都の下宿から上京し、東京都内の出版社の宿泊施設で担当編集者らと吉報を待っていた平野さんは、その瞬間、正座し直し、受話器を持ったままお辞儀をした。

左の耳たぶにはピアスがキラリ。直前まで金髪に染めていたという。

直後に開かれた受賞会見では、「懐古趣味とといわれるのは嫌です。常に現代的な関心を持っています。混とんとした文学状況ですが、次の時代への新しい可能性の一人として、ぼくがいると思います」と、強気な構え。「なぜ小説を書くのか」といった質問には、「本質的な文学論は、いずれきちんとした形で書くまで、待っていて下さい」ときまじめな一面も見せた。

愛知県生まれ。乳児のうちに父が急死し、高校まで母の故郷、北九州市で育った。文学だけでなく、音楽や美術まで幅広く芸術的関心を持ち、「ガリ勉タイプでなく、余裕のある生徒だった」と、高校時代の担任評。仲間とバンドを組んでいた時期もある。

法学部で政治思想史を専攻しているが、二年前から創作と読書中心の生活。

「二月の授賞式当日に行われる卒業試験の方が、うまく突破できるかどうか……」と頭をかいた。

強運の持ち主は努力家でもある。ボードレールやランボー、エリアーデなど、近代西欧の「知」をたっぷり読み込んできた。同時に、「日蝕」を書くにあたっては森鴎外の史伝ものを朗読テープで繰り返し聴き、文体を体に染みつかせた。

漢語的表現を凝らした重厚な文章による主知的・高踏的な作風は、鴎外や三島らを思わせるとされる。平野さんが送ってきた受賞作「日蝕」を昨年の八月号の巻頭に据えるという異例の処遇で、デビューを後押しした「新潮」編集長の前田速夫さんは、袋小路に入った現代文学を打破するパワーを感じたという。

三島の再来という世評にも「最も影響を受けたのが三島。気質も似ているかも」と、臆するふうもない。「この早熟な才能は、芥川龍之介や中島敦をほうふつさせる」と語る選考委員も。

受賞を喜び握手する、芥川賞の平野啓一郎さん（左）と直木賞の宮部みゆきさん（14日午後9時15分、千代田区の東京会館で）＝加藤祐治撮影

指導教授　びっくり

平野さんを一九九六年秋から一年間、ゼミで指導した小野紀明教授(49)（政治思想史）は、大阪市淀川区の自宅で受賞の知らせを聞き、「候補に挙がることだけでも驚きだった。自分のことのようにうれしい」と声を弾ませた。

今月十二日夜、賞の発表に合わせて上京する平野さんから「これから東京へ行ってきます。もしかしたら先生をお騒がせすることになるかも知れません」との電話があり、「いい知らせを待っているから。頑張って来なさい」と励ました。

平野さんのゼミでの研究テーマは、受賞作「日蝕」にも出てくる「錬金術」。自分を含め三十二人のゼミ仲間との旅行では、豊富な知識をもとに愉快な話をして、周囲を笑わせて座を盛り上げるなど気さくな性格だという。

母は笑顔一杯

北九州市八幡西区の平野さんの実家では、午後七時過ぎから愛知県の親類やマスコミから次々とお祝いの電話がかかり、母親の特定郵便局長、節子さん(58)は笑顔いっぱい。約三十分後に平野さん自身からも短い電話が入り、節子さんは、おめでとう」と祝福の言葉をかけた。節子さんは「自分で見つけた人生の出発点で、素晴らしい門を開けていただいた皆さんに感謝しています」と話していた。

直木賞に宮部みゆきさん

直木賞の選考も十四日行われ、今回で六回目の候補になった人気作家、宮部みゆきさん(38)の「理由」（朝日新聞社）に決まった。

（17面に「顔」）

宮部さんの作品は、バブルがはじけ、値下がりした元〝億ション〟で起きた「一家四人惨殺事件」を調べる過程で浮かび上がる住宅ローンの悲劇、現代家族のひからびた風景を、ドキュメンタリー手法で描いた社会派ミステリー。

五木寛之選考委員は「現代日本の光と闇、日本人の社会的状況を描き、心の琴線に触れてくる。作家的力量があり、文体もしっかりしている。遒巡することなく、すべての選考委員が支持した」と語った。

◇

芥川、直木賞の贈呈式は、二月十九日午後七時から東京・丸の内の東京会館で。正賞の時計と副賞百万円が贈られる。

第120回直木賞を受賞する
宮部（みやべ）　みゆきさん

法律事務所勤務などを経て作家に。「火車」で山本周五郎賞。38歳。

顔

小説の「職人」になりたい

「みんなでいただいた賞だと思っています」という第一声は、自分のためというより、これまで作家を支えた周囲への気遣いにあふれていた。この人の人気・実力からすれば、六度目の候補による受賞は、むしろ遅すぎたくらいだろう。

受賞作「理由」は、住宅ローン破産、不動産競売という今日的な問題を織り込みながら、バブル時代が今なお「ごく普通の家族」に与える深い傷を多重的な視点で追った。得意の柔らかい文体を捨て、あえて飾りのない硬質な語り口に挑み、「まさに真っ向勝負の気迫」（五木寛之氏）と全選考委員をうならせた。

「独り身の私にとって、同居している家族はやはり生活の土台。その家族が今、壊れかけているとしたら大変ですが、そう思い込むことも危険だと思います」

東京・深川で四代続く下町っ子。親子親せきが肩を寄せ合い、隣人は互いに声をかけ合い、みな意地っ張りで泥臭い。そんな土地を心から愛している。

「年齢にしては頭がアナクロだと言われますけれど、お寺にも神社にもお稲荷さんにも縁のない生活は、むしろ自分が神になりたがる人間を作ってしまうんじゃないかな」

それだけに、最近の少年犯罪の多発には心を痛める。「子供の心に届くもの、小学生に読んでもらえるようなファンタジーに挑戦したい。私、欲張りなんですよ。でも、そそっかしいので、調子に乗って転ばないようにしたいです」

文化部　石田　汗太

難解？ 話題の芥川賞作

日蝕

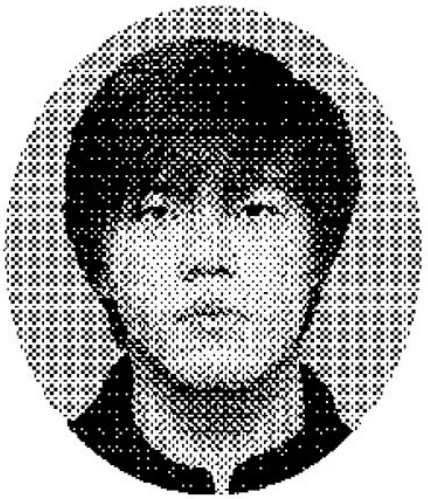
第百二十回芥川賞に決まった平野啓一郎氏の『日蝕』がさっそくベストセラーリストに登場した。

茶髪にピアスが似合う二十三歳の京大生。現役学生としての芥川賞受賞は村上龍氏から二十三年ぶり。その文章は三島由紀夫、渋澤龍彦と比較されるように絢爛（けんらん）豪華で、U・エーコの「薔薇の名前」にも似た荘厳な小説世界――。これだけ話題がそろえば、ふだんは小説を読まない層まで、つい本を買ってみたくなるだろう。新潮社は、話題性に乗って二十九日までに約十七万部の増刷を決定。全国の書店で今、一斉に平積みになっているはずだ。

ただ、その表現の難解さは半端でない。同賞の選考委員ですら、「漢和辞典を引きながらでないととても読めなかった」と感想をもらしたほど凝った漢文的な文字遣いなのだ。しかもカトリックと異教が対立する十五世紀の南ヨーロッパを舞台としているから、キリスト教と教会史に関する知識がある程度はなければ、錬金術師や両性具有者が登場する意味合いを理解するのは難しい。

同社では「読み通せる人は何割いるだろう」と、今後の反響の広がり方を注意深く眺めている。（1300円）

（M）



平野啓一郎氏

▲贈呈式で握手する平野啓一郎さんと宮部みゆきさん（19日、東京会館で）

第120回芥川賞・直木賞贈呈式

平野さん　ハッタリ野郎と思われぬよう
宮部さん　独りぼっちの物書きへの名誉

第百二十回芥川・直木賞（日本文学振興会主催）の贈呈式が十九日、東京・丸の内の東京会館で開かれた。

「日蝕」（新潮八月号）で芥川賞を受けた京都大法学部四年の平野啓一郎さん(23)は、この日が卒業試験の最終日。このため、式は例年より一時間遅らせて始まった。

母親と上京した平野さんは、スーツに茶髪、ピアスというういでたちで登壇。「ありがたい言葉を頂き、ますます創作意欲が高ぶっています。とんだハッタリ野郎だったと思われないように、よいものを書き続けていきたい」とあいさつ。漢語的文体を現代に生かす作品を書いた、挑戦的な若者らしい言葉で締めくくった。

直木賞を「理由」（朝日新聞社刊）で受けた宮部みゆきさん(38)は、受賞決定から一か月で、「火車」など既刊本が二百万部近くも増刷された人気作家。あいさつでは、まず所属する日本推理作家協会では〝呪われた雨女〟と言われているエピソードを披露しながら、「また雨を降らせてしまいました。お足元の悪いところ、大変ありがとうございます」と感謝の辞。続けて「受賞を多くの方に、喜んでいただきました。机に向かっている時は独りぼっちの物書きにとって、これほどの幸せと名誉はありません」と感謝の連続のあいさつだった。

これに先立ち、芥川賞選考委員の河野多恵子氏は、「日蝕」について「作品を読んで生まれて初めて出合うような新鮮な感覚を持ったのは何十年ぶりかのことです。初孫にあたる世代の人が書いていると知り、変な感じもしましたが、世紀が変わる節目の象徴であったと言われることになるかもしれません」と語った。

満場一致で直木賞に決まった「理由」を講評したのは井上ひさし委員。一月十四日の選考会終了後に、田辺聖子委員が「最後までよく働いてくれた親孝行な長女が、やっとお嫁に行ったような感じ」とつぶやいた言葉を紹介し、五回の落選を経て、〝遅過ぎた受賞〟とも言われた宮部さんを慰労した。

立ち読み版はここまでです。
この続きは製品版でお楽しみください。